

“Road to Sydney”を回想して  
—体操日本復活に向けた取り組みから—

村上 哲朗



# “Road to Sydney”を回想して —体操日本復活に向けた取り組みから—

村上 哲朗\*

## Memoirs of “Road to Sydney” in 2000 — Struggle for Restoration of “Taisou Nippon” —

MURAKAMI Tetsuro

“Road to Sydney”は、2000年に開催されたシドニーオリンピック大会に対して、日本体操協会が「体操日本復活」に向けて設置した、シドニー対策強化本部のスローガンとして掲げたキャッチフレーズである。正確には、当時の同志ともいえる審判部員から、新体制の船出に対してエールを込めて贈られた「応援団扇」に記されたメッセージであったが、直ぐにそれは強化本部の合言葉となった。

1996年のアトランタオリンピック大会で、日本男子体操チームは団体総合10位となり、オリンピック大会の体操競技に参加を果たした黎明期を除けば、過去最低の順位に甘んじた。競技委員会は実質解散の様を呈して、競技委員長は引責辞任の形で役職を退き、委員長不在の中で、役員任期の残期間を消化する形で事業が進められた。この期間を副委員長の立場にあった私が采配することになったのだが、日本体操協会は次期強化委員会設置に向けて動き出し、紆余曲折の末、2000年シドニーオリンピック大会に向けた責任者に私が選出されることとなった。早々に、シドニーオリンピック対策強化本部が設置され、競技委員長の私はスタッフの人選を急いだ。

これまで体操競技は、オリンピック大会における日本の獲得メダル数では、参加競技におい

て最も多く、常勝日本を印象づける強さで「体操日本」の名を名実ともに示してきただけに、1984年ロサンゼルスオリンピック大会からの、斜陽ともいえる時期を歩み続けていたとはいえ、団体10位という屈辱は緊急事態といえることであった。選手強化の遅れも否めず、対国際に向けた戦略的なビジョンも必ずしも明確とはいえず、もはやV10を達成していた黄金時代の光は闇に突入しようとしていたといっても過言ではなかった。

2004年アテネオリンピック大会で、男子日本体操チームは念願の団体総合金メダルに再び咲いた。アトランタオリンピック大会の惨敗といえる結果から、再び「体操日本」の復活を目指したシドニーオリンピック大会に向けた取り組みは、何を以てアテネオリンピック大会に繋げられたのか、“Road to Sydney”に対する取り組みを基に回想する。

まず、“Road to Sydney”に向けた4年間の取り組みを回想するに当たっては、体操競技とオリンピック大会について、また、「体操日本」復活に向けた取り組みの意味合いからも「体操日本」といわれた由来について触れることとする。

\* 東洋英和女学院大学 人間科学部 教授  
Professor, Faculty of Human Sciences, Toyo Eiwa University

## 1. 体操競技とオリンピック

体操競技の源流は、「ドイツ体操の父」といわれるヤーン (Friedrich Ludwig Jahn 1778-1852) によって、青少年に対し、身体強化のために奨励された体操が体操競技発展の契機とされ、男子においては、第1回アテネオリンピック大会から(女子は第9回アムステルダム大会から)正式種目として取り入れられて現在に至っている。スポーツの多くがヨーロッパ諸国において発祥したものであるが、体操競技もまたヨーロッパで発展し、第14回大会まではドイツやスウェーデン、スイス、イタリア、フィンランドといったヨーロッパ諸国がその強国として名を連ねていた。しかし、第15回大会1952年ヘルシンキオリンピック大会から、鉄のカーテンのバールを脱いだソ連(現ロシア)の参加が体操競技の歴史を大きく変えていくことになった。芸術性と高度な技術を備えた演技で、世界の体操競技はソ連の体操によって方向付けられたといっても過言ではない。その後、オリンピックと世界選手権大会は、ソ連、日本の2強時代で27年間の歴史を刻むことになり、さらに、中国、アメリカ台頭の新時代を経て、現在は、王座を競うサバイバル時代に入っているといえる。

## 2. 「体操日本」と世界に言わしめた由来

日本が体操競技を本格的に始めたのは、1902年慶應義塾大学に正式に器械体操部が作られた頃からである。「全日本体操連盟」を創立して国際体操連盟に加盟を果たし、迫る第10回ロサンゼルスオリンピック大会への出場を目指したのである。しかし、情報の乏しかった日本は、優勝のイタリアから140点差の大会最下位という屈辱を味わうことになる。このことは、逆に日本の選手達を発憤させることとなり、元来、器用とされた日本人の特性が大いに活かされ、日本の競技力は短期間で世界に通用するものになっていった。そして、ソ連が優勝を果たしたヘルシンキオリンピック大会から2年後のローマ世界選手権大会でソ連に次いで2位とな

り、ついに日本は1960年のローマオリンピック大会でソ連の牙城を崩し王座に就いた。そして、その王座にオリンピック大会5大会、世界選手権大会5大会と連続20年間に亘って君臨し続けた。この時期にあつては、共産圏国の国力を以てメダル獲得に向けた国策に対して、体育活動から始められた自主的なスポーツ活動ともいえる日本の成果は、世界各国においては理解しがたく映っていたのか、「何故、日本は強いのか」と、極東の国の文化に注目が注がれ、各国から日本へ体操留学生が訪れた。また、指導者として招聘されることも多く、正に「体操王国日本」として世界がその存在を認めていたといえよう。

## 3. 「体操日本」の斜陽とアトランタオリンピック大会(1996年)の惨敗

1960年のローマオリンピック大会から、1978年のストラスブール(フランス)世界選手権大会までのV10としての連勝はこの大会で止まる。次大会のオリンピックはモスクワ大会であったが、西側諸国のボイコットで日本も不参加であった。V11を目指した1979年のフォートワース(アメリカ)世界選手権大会ではソ連に王座を奪還され、モスクワ不参加のあとのロサンゼルスオリンピック大会では、今度は東側諸国のボイコットでソ連が不参加にもかかわらず、日本はアメリカ、中国に次いで3位となった。次のモントリオール(カナダ)世界選手権大会では4位となって表彰台から離れる結果となり、その後の世界選手権大会では表彰台を逃し続け、かろうじてオリンピックのソウル(韓国)、バルセロナ(スペイン)大会は3位となって表彰台を死守した。1995年鯖江世界選手権大会では自国開催として、強化の成果も現われて団体2位に躍進した。しかし、迎えた1996年のアトランタオリンピック大会では、選手の怪我による交代劇も重なったが、団体10位の結果となったのである。「体操日本」といわしめた姿は明らかに斜陽の時期にあつたといわざるを得なかった。

そのことについてであるが、日本の王座陥落の黄色信号は、日本がV10を果たしたストラスプール世界選手権大会において既に予兆があった。大会の前評判はソ連優位とされており、それは、ソ連の若手選手の台頭であったといえた。これまで、基本的な技術が評価される規定演技とオリジナリティーに富んだ技を組み入れた自由演技で勝敗を競う体操競技において、基本技術の実施に優れ、美しい表現が持ち味の日本が規定演技でリードし、過去から王座奪取のために取り組んできた「ウルトラC作戦」<sup>1)</sup>となる新技開発によって各大会をリードしてきた。しかし、ストラスプール大会では、ソ連の若手選手達によって多くの新技発表が予定されていたからである。それに対して日本の分は悪かった。世代交代の遅れもあり、黄金時代を飾ってきたベテラン選手に頼るところが多く、かろうじてソ連のミスの連発に助けられた形となってV10が達成されたからである。翌年のフォートワースの世界選手権大会で日本は世代交代を果たしたが、強化の著しいソ連の前に王座を明け渡した。

ソ連のジュニア強化の成果を目の当たりにしていた日本もソ連のジュニア強化プログラムを参考にして、1980年代からジュニア強化を進めていたが、その成果を見るのはまだ先のことであった。その中において、1988年のソウルオリンピック大会にデビューし、日本を牽引した高校生コンビの池谷・西川選手（当時大阪清風高校）の話題は明るいニュースとして日本中を沸かせたが、日本においては、各地の学校教諭による熱意ある指導に頼った地域強化となっていたので、全国的な底上げとは成りにくかったといえる。

日本は中・長期に亘る選手強化に課題を持ちながら、直面する大会では厳しい結果が続き、アトランタオリンピック大会の結果は、日本の強化対策を根本から見直すビジョン作りが必要になった大会といえた。

早急に立て直しが期待された「シドニー対策」であったが、表彰台を目指す対策は選手選

考が課題であるだけでなく、中・長期を目指した課題が浮き彫りにされていた。それゆえ、私としては、4年後のオリンピック大会はもちろん短期課題として迫られていたが、その後続く王座奪還への恒久的路線を構築することに対してもビジョンの焦点を当てていた。

そうして始まった「体操日本復活」に向けた取り組みを回想し、次代に向けた課題を考えたい。

## 4. シドニーオリンピック大会に向けた取り組み

### 4-1 選手の意識改革を目指したチーム合宿の重視と回数の増加

当時の選手強化は、各所属によってほとんどがなされていた。代表選考会までは日常の練習形態であるので、各所属が選手の練習場所であることは妥当なことであるが、代表選手となって1つのチームになっても、まとまった練習は大会まで数えるほどの回数で行われていた。他国の代表選手にあっては、ナショナルトレーニングセンターが完備されていて、国の強化財源で選手強化が継続されるので、チーム内の意識も共有されやすく、強化対策と直結した練習の成果を生んでいたといえる。日本においては、チーム力もさることながら、個人の技量の向上が求められ、最終的に集められた選手の技能によってチームの競技力が整えられるという大会に向けた調整方法を採用していたので、合宿の初め頃においては、選手間においては多少なりとも意識の差が見受けられることもあった。もちろん、勝敗に対する意識が希薄であったわけではないが、チーム全体としてのモチベーションに差があったということである。このモチベーションの違いが、大会前になると表われて、チームの不安材料となって個人やチームの調整状態に影響してくるのである。また、選考される選手達においては、出身校や所属母体もまちまちであったり、構成員の中にあるのは、1所属からの選手が比較的多くを占める場合には、他選手への配慮も必要とされる。このことについ

ては、チーム合宿を数多くこなすことでコミュニケーションの形成強化にその効果を期待したのである。

私は、当時ナショナルセンターの無かった日本の強化対策として、できるだけチームでの合宿を計画し、遂行した。合宿が多いとミーティングの機会も多くなり、選手1人ひとりの考え方や調子の整え方なども分かってくる。初めの頃は、当時王座に就いていた中国に対して「打倒中国」を説いてもその意識には遠いものがあった。まずは、できるだけ代表となった同じメンバーでチーム合宿を行いながら寝食を共にして、全員が意識を高めて行くことに務めた。(日本のナショナルトレーニングセンターは2001年10月に開所)

#### 4-2 対国際競技会への選手派遣方法の見直しについて

V10時代における日本チームは選手層も厚く、オリンピック・世界選手権大会の代表以下の選手でも十分に世界に通用する選手も少なくなかった。アジア大会へは日本のベスト7以下の選手が選抜される時期もあったし、ユニバーシアード大会は、ほとんどが大学生で構成されていた。また、戦績も誇れるものを持ち帰ってきていた。しかし私は、低迷期にあった日本チームにおいては、どの大会に対しても日本代表としてのベストメンバーで大会に臨むことを選択し、スタッフも同様にできる限り固定化した。各国においては、どの大会においてもコーチングスタッフはほとんど同じメンバーが帯同し、各大会において、コーチ、審判間で情報交換も頻繁に行われていたのを目の当たりにしていたからで、このことが対外交流の契機となることとして重視していたからである。選手においては、大会の規模に限らず勝利する体験をすることにより、よくたとえに出される“負け癖”に浸ることが無いようにしたかったのである。また、これまで比較的少なかったジュニア選手の海外合宿や国際大会の派遣も積極的に行った。これは、ジュニア強化本部の掲げた強

化プランを推し進めたものであるが、ジュニア時期から国際感覚を身につけさせ、同時に、帯同するコーチに対しても国際競技会を経験させながら、国内における練習や競技会が将来の国際大会に直結する意識作りをするためであった。この取り組みは、選手の意識と現場指導者の日々の練習に対するモチベーション構築に大きな意義があったと参加コーチ達からも報告されていた。

私の在任期間(4年)に派遣した主大会となる国際競技会としては、1997年のシチリア(イタリア)ユニバーシアード大会、ローザンヌ(スイス)世界選手権大会、1998年のバンコク(タイ)アジア大会、1999年のパルマ(スペイン)ユニバーシアード大会、天津(中国)世界選手権大会、2000年のシドニー(オーストラリア)オリンピック大会であるが、全てにベストメンバー、コーチングスタッフで臨んだ。この中で1つのエピソードを紹介すると、ロシアは、1999年のパルマユニバーシアード大会に国内のベストメンバーで参加してきた。その年に行われる天津世界選手権大会を前に弾みを付けることが大きな目的だったと推察されるが、日本に敗れて、サブ会場で選手に対して叱責するコーチ陣の姿が焼き付いている。目標とする大会の前にいかに印象を強め、前評判を高めていくことも戦略の1つとして欠いてはならないことであると意を強くした場面であった。(程なくヨーロッパ中の体操関係には、日本がロシアに勝利したとしてニュースが回ったと、フランスの体操関係者から連絡が入った)大会派遣の成果が好材料として表われたといえる1幕であった。

#### 4-3 日本版ジュニア強化マニュアルの作成と普及について

1980年代から日本体操協会は、ジュニア強化部(競技委員会の強化体制は、ナショナル強化部とジュニア強化部で各強化が行われていた)が中心となって、ジュニア強化プログラムの作成のためソ連への情報収集を重ねて調査研

究を進め、強化プログラムとして部分的に活用はされていた。この頃では、まだ中国との交流は浅く、中国版の強化プログラムの詳細は入手されてはいなかった。新体制の課題の1つは、中・長期に亘るジュニア強化と普及であった。幸い、新体制の強化スタッフメンバーには、中国ナショナルメンバーであった呉氏や、韓国チームのコーチを務めた後藤氏が加わっており、彼らの助力を得ながら体操強国であるロシアと中国の強化プログラムを参考に、日本版のジュニア強化トレーニングマニュアルの作成を行った。国内にナショナルセンターが無かっただけに、それに変わる機能を考えたとき、箱物のセンターに頼らずとも国内のジュニア指導者を中央に集結してジュニア強化コーチに位置付け、共通の指導マニュアルによって全国の逸材候補を強化していこうと考えたのである。多くの全国の指導者によってトレーニングマニュアルをテキスト化し、DVDにして全国に配布した。地域中心の強化現場にいた地方の指導者は、日本体操協会のコーチとして位置付き、指導法は共有されることになった。そして、これによって地域限定とならない全国からの優秀な選手が育ち始めた。(この強化育成は現在も引き継がれている)

#### 4-4 日本代表選手によるヨーロッパ遠征ツアーの実施と国際間交流について

1998年タイで行われたアジア大会において日本は、中国、韓国に次いで団体の3位であった。シドニーオリンピック大会で表彰台を目指す日本にとって、アジア大会での3位は惨敗に匹敵することとして捉えられた。1997年のローザンヌ世界選手権大会においては僅差で4位となっただけに、上昇気流にのせたかったというのが本音であったが、アジアでの3位という結果は、国際評価にあって事態を憂慮されるべきこととして国内関係者にも捉えられたし、世界中に与える印象としては極めてマイナスなことであった。選手のオリンピックに対する表彰台に向けたモチベーションも些か下降気味に

映り、2年後に迫ったシドニーオリンピック大会に向けては、なんとしても世界に日本の印象を高めておく必要があったことから、アジア大会からの帰国前ではあったが、代表メンバーを含む選手団によるヨーロッパ遠征ツアーの決行を決断した。国境はあるとはいえ、ヨーロッパ諸国は地繋りの利点を生かしてよく交流遠征を行う。これによって自国チームの強化過程をアピールし、情報交換も行っていたものと考えられる。

体操競技は、審判員による採点競技である。ルールと採点規則があるとはいえ、採点するのは主観的な印象をも評価に加わるであろう“人”であるから、チームに対する印象度も重要な部分として考えられるのである。採点規則は1949年に作成され、1964年からは4名の審判員で採点され、上下を除いた中間2名の平均点が結果点として採用された。今でこそ、難度を判定する審判員と実施を評価する審判員との分業制になったものの、当時は、1人の審判員が難度と実施を評価し、体操競技の芸術部分として加点対象になっていた「決断性・独創性・熟練性」をも加味して序列に役立てるのであるから、前評判の高いチームや選手に対しては、少なからず期待を含めた印象度も関わりを持つであろうことは想像に易い。

私が考えたのは、アジア大会の結果によって日本チームがアジア3番目のレベルであることが印象づけられないうちに、オリンピックに多くの国が参加するヨーロッパを回り、マイナス印象を払拭することであった。遠征時期は、その年の冬季間の国内試合期を外した時期とし、訪問国として選んだのは、自由圏からは交流の深いフランスと、共産圏からは国内において開催されていた国際大会の折に打診を進めていたルーマニアの2カ国とした。遠征のエピソードは割愛するが、ルーマニアでの遠征では、これまで日本に厳しめな評価も否めない審判員とも交流を果たし、良好な関係に近づけたと思われる。(シドニーオリンピック大会本番では、ルーマニアを始め、ヨーロッパの審判員達との

再会と交流を深められたことは日本チームにとって好材料といえた)

#### 4-5 アジア体操連合 (A.G.U) の協力体制への働きかけ

体操競技がヨーロッパで発祥し発展したことで、ヨーロッパ諸国は自由圏、共産圏問わず連携が強い。ヨーロッパ体操連合 (U.E.G) は、A.G.U よりも前に組織され、連携が保たれていた。A.G.U の中で、団体でメダル獲得を目指す体操主要国といえるのは、中国、韓国、日本であるといえるが、こと体操における3国の交流については希薄な関係の歴史が長い。不幸にして戦争の影響も否めないが、これまでのオリンピック大会におけるアジアのまとまりはあまりなかったといえる。政治的な言及は避けるが、日本がV10を果たしていた時期は、アジアで日本1国が体操強国として走っていた中で、中国、韓国との交流は必ずしも親密には行われていなかったといえる。中国と韓国の関係は良好といえたが、日本の競技力が低迷したその時期においても、やはり、日本は1国の中にあっただといえる。

私は、競技委員長就任後 韓国チームのコーチであった後藤氏の伝で、強化本部長と韓国に赴き、就任の挨拶をかねて交流強化を申し出た。渡韓は毎年行い、特に、ジュニアチームにおける日韓両国の交流合宿を重ねた。程なく、中国から「我が国にも来てほしい」旨のメッセージが届き、スタッフに入っていた呉氏の伝で中国ナショナルセンターに初めて出向き、合同練習が叶った。選手間のみならず、スタッフ間においても友好を深め、アジア連合としての機能は高められ、協力体制は確実に高まっていったといえた。(シドニーオリンピック大会本番では、F.I.G : 国際体操連盟指名の日本の審判員から“アジアがまとまった”と競技前日に報告があった)

私達が“Road to Sydney”として、「体操日本復活」に向けた4年間に取り組んだ主なこと

は以上である。シドニーオリンピック大会で男子団体は4位、前回のアトランタオリンピック大会に引き続き2大会連続でメダル獲得は成らなかった。取り組みの成果は確かにあったといえるが、最終目標の団体メダル獲得には及ばなかった。課題と次期大会に向けての展望を添える。

#### 5. “シドニー”から“アテネ”へ、次代への課題と展望について

選手の口からは、よく“オリンピックには魔物がいる”と聞くが、4年に1度のオリンピックの魔力であろうか、オリンピックに近づく後半の合宿になってくると、選手達の技に狂いが生じてくる。納得のいくまじめにこだわる部分もあるのだろうが、鉄棒から手が離れなくなるとか、着地に狂いが出てくるとか、詰めの段階でそれが起こってくるのである。

1984年ロサンゼルスオリンピック大会の国内コーチとして合宿に同行していた私は、選手達の異変を感じていた。ちょっとしたことに敏感になっていたり、よくいえば、研ぎ澄まされていく様子であろうが、普段の会話にないやりとりも出てくる。私流にいうと「獣のようになっていく」姿であった。それだけオリンピックというのは、選手にとっては大きな壁となるのであろうと考えるのである。対シドニーの時もそのような歪みが起きていたのだと思うが、過去のベテランといわれるメダリスト達は、それまでのいくつもの修羅場をくぐりぬけ、超えていったのだらうと改めて経験の重要性を実感した。

詰めが不十分のまま現地調整に入ったことが最も大きな悔いであったし、解決していなかった課題であったといえる。本番では普段にないミスが現れ、挽回する機会は極めて厳しいものであった。

世界情勢は大きく動いていて、表彰台を争っていたソ連と日本の過去の2強時代は、中国を始め、世界各国が名を連ねてくるようになり、その後、ソ連の崩壊で連邦構成共和国となった

ロシア、ウクライナ、ベラルーシ等金メダルを狙える国が横並びとなって現れたこと、また、規定演技の廃止や団体戦においても種目のスペシャリスト採用が可能になったルール改正など、体操競技の姿は日々更新されていくようである。その中であって、日本がアテネオリンピック大会で金メダルに返り咲いたのは何故だったのか。

私は、シドニーオリンピック閉幕とともに競技委員長を退いた。V10 経験者の新しいリーダーが選抜され、新たな強化本部設置とともに競技委員長に就任した。新競技委員長の要請で、私は副委員長として残ることになった。「体操日本復活」に向けた道半ばということで、対シドニーに向けた4年間の取り組みを生かしていく意向を受けた形であった。

アテネに向けた新体制が動き出し、2003年のアナハイム（アメリカ）世界選手権大会で日本は団体3位にステップアップした。（2001年 Gent（ベルギー）世界選手権大会はテロ対策のため不参加）アテネオリンピック大会のエースとしてチームの中心となった富田選手（セントラル）以下、ジュニア強化で育ってきた基礎力の高い選手達を中心メンバーとなったのである。選手達の目標は、2004年アテネオリンピック大会の団体金メダルであった。その準備は至極具体的だった。それは、日本の「美しい体操」を再現することであった。それは、かつて日本がV10を果たしていたときの姿で、あのソ連でさえ日本の体操を手本にして、日本選手の演技写真を自国のトレーニングテキストに模範として掲載していたのであるから、体操競技の目指す共通の姿は芸術性の高いかつての日本の体操の中にあつたといえよう。

「美しい体操」は、基本技術の上に成り立つもので、その基礎は、ジュニア時代における反復練習に他ならないといえる。「練習は試合のように、試合は練習のように」と繰り返される日々のルーティーンが、大舞台であっても安定したパフォーマンスに繋がる精神的なよりどころなのだと考えられる。また、競技会へのコー

チの帯同にしても、強化本部の代表コーチだけではなく、日頃選手をみている所属コーチを付けることで選手にも平常心の中で準備が進められるというメリットも考えられた。

シドニーから4年後のアテネオリンピック大会での金メダルは、メディアも「体操日本復活」と取り上げた。2008年の北京、2012年のロンドンオリンピック大会での銀メダルは、中国と日本の2強時代を印象づけ、日本は、2015年のグラスゴウ（イギリス）世界選手権大会で金メダルを奪取し、2016年リオデジャネイロオリンピック大会で再び王座への返り咲きを果たした。絶対的王者として世界が認める内村選手（リンガーハット）も「美しい体操」を体現している選手であるが、彼を生み出したのもまたジュニア期の長期強化と環境整備であるといえよう。

アトランタからシドニーに向けた取り組みがいかにか引き継がれたかは確信として断言には至らないが、「体操日本」が育んできた道の継承は、強化本部の対策以上に、選手達自身によってなされていたものであることは確信できる。採点競技であるが故に戦術や戦略を巡らせてきた長い勝敗の歴史は、今、大きな変革の岐路にあるといえる。AI導入の採点化が試みられている。新時代でのAI導入によって表現スポーツにも変化が起こるのであろうか、今後の体操競技のあり方に思いを馳せながら、来年に予定される TOKYO 2020 オリンピック・パラリンピックの成功を願い、回想のペンを置く。

## 注

### 1) 「ウルトラC作戦」

「ウルトラC」は、体操競技の造語で、1964年東京オリンピックにて、日本代表チームが当時の最高級難度『C』（A、B、Cで難度が区分けされていた）を越える技を披露したことから（山下跳び等）生み出された造語で、D難度設定後に使われなくなったが、体操以外でも難易度の高いことをクリア・達成するという意味に用いることもある

## “Road to Sydney”を回想して

流行語とされた。ことばの誕生には諸説ある。(参考 ブリタニカ国際大百科事典小項目辞典の解説より)

### 参考文献

- ・ 遠藤幸雄・小野清子 『体操競技を見るための本』 同文書院 1982年
- ・ 武田三省 『体操水滸伝』 社会思想社 1990年
- ・ 水野泰男編著 『体操日本栄光の物語』 (財)日本体操協会 1972年
- ・ (財)日本体操協会 『体操競技白書』 (財)日本体操協会 1981年
- ・ (公財)日本体操協会 『体操競技教本』 (公財)日本体操協会 2011年版 2019年版

